

# Lydia Maria Child の “The Two Christmas Evenings” における道徳的教訓復活への試み

---

本 岡 亜 沙 子

---

**key words:** アメリカ児童文学、リディア・マライア・チャイルド、  
「2度のクリスマスの夕べ」、道徳的教訓、奴隷制

## はじめに

リディア・マライア・チャイルド (Lydia Maria Child, 1802-80) は、1826年から34年にかけて、アメリカで初めて幅広い読者層の獲得に成功を収めた児童雑誌『ジュヴナイル・ミセラニー』(*The Juvenile Miscellany*, 以下『ミセラニー』と称す)の初代編集長を務めた (Mills 55)。<sup>1</sup> しかし、奴隷制廃止運動への支持を公然と主張した『アフリカ人と呼ばれるあの階層のアメリカ人のための抗議文』(*An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans*, 1833) が読者の反感を買い、雑誌の不買運動にまで発展したことで、チャイルドは編集長の座を半強制的に退かされた。<sup>2</sup> その際、彼女は、1834年7月・8月合併号の注記で、“a reluctant and most affectionate farewell to my little readers” (323) という言葉をもって読者に別れを告げた。以降、『ミセラニー』の短篇を主に集めた『子どもたちに贈る花束』(*Flowers for Children*, 1842-43) 3巻本を編纂するものの、チャイルドは、児童文学作品に人種問題を内包させることに非常に保守的な態度を取る。事実、彼女は、全51作品の中で、奴隷制批判作品はおろか、人種問題の絡む作品さえも2編しか含まない。

本稿で扱う「2度のクリスマスの夕べ」 (“The Two Christmas Evenings,” 1866、

---

<sup>1</sup> 雑誌の題名に「寄せ集め」という言葉が用いられているように、チャイルドは、アメリカの歴史や地理だけではなく、黒人や「インディアン」、貧乏白人など、アメリカ特有の人種・階級問題を扱った作品をも集め、少年少女に送り届ける。『ミセラニー』内の政治性については竹谷悦子氏 (Taketani) 22-28；カーチャー 157-58 参照。

<sup>2</sup> 『抗議文』出版後、『ミセラニー』編集長の退任、パトロンとの離別など、ボストン文学界から追放されたチャイルドの様子についてはミルス (Mills) 54；カーチャー 169-70 参照。

以下「クリスマス」と称す)は、後に高級児童雑誌『セント・ニコラス』(*St. Nicholas*, 1873-1940)に併合される児童雑誌『アワー・ヤング・フォークス』(*Our Young Folks*, 1865-73、以下『フォークス』と称す)に掲載された短編3本のうちの一つであり、彼女の最後の児童文学作品でもある。

歴史家ジェイムズ・マーティン (James Marten) は、孤児院や黒人学校への寄付金集めに開かれた本作品内の慈善市が、北軍軍資金調達に一役買った、女性解放運動家や全国衛生局主催の慈善市の家庭版であると指摘する (*Children's War* 33)。<sup>3</sup> しかし彼は、慈善市自体の政治性は認めるものの、慈善市内部の政治性には論考を及ばせない。<sup>4</sup> さらにチャイルドが政治色の強い作家であることを認識しているはずのチャイルド研究者も、「クリスマス」を黙殺、少なくとも研究対象外に追いやってきた。事実、チャイルド研究の第一人者といえる批評家キャロリン・L・カーチャー (Carolyn L. Karcher) でさえ、本作品の題名を作品一覧に記載するものの、内容分析に踏み込まない。<sup>5</sup> 本稿の目的は、児童文学というジャンルに決別宣言をしてから約30年後に、人種問題の色濃い作品を児童文学として再び書くことに固執したチャイルドの真意に迫ることにある。

### 1 児童文学と道徳的教訓

本節では、チャイルドの書簡に着目することで、彼女が児童文学作家としての再起を志した動機を追究する。まず、1873年3月12日、チャイルドが『フォークス』の元編集者の一人ルーシー・ラーコム (Lucy Larcom, 1824-93) に送った書簡の中に、児童文学における道徳的要素の重要性を示唆する記述が残されていることに注目しよう。

In the juvenile literature of the present day, I decidedly think there is too great predominance of the *fairy* element. *Moral* influence is too much neglected. Of cour[s]e I do not mean the *preaching* of morals. I mean that stories should be written with a view to bring the moral emotions into *activities*; such emotions

<sup>3</sup> 批評家ビバリー・ゴードン (Beverly Gordon) は慈善市を“fundraising fair”(xix)と命名している。事実当時の女性活動家たちは、人形や服、自家製の食べ物などの販売による収益を反奴隷制協会の設立資金に、さらに南北戦争期の活動家たちは北軍支援物資の購入資金に用いた。チャイルドが慈善市に貢献していたことはクリフォード (Clifford) 258-60に詳しい。

<sup>4</sup> マーティンは、南北戦争に関連する児童文学作品のアンソロジーに、子どもが銃後の担い手として描かれる作品として「クリスマス」を収録している (*Chancellorville* 7)。

<sup>5</sup> チャイルド研究におけるカーチャーの果たした功績は、牧野有通氏188-89参照。

as tenderness toward the aged, kindness to animals, compassion for the poor and suffering, brotherly feeling toward all races of men, and all religions. (Milton and Holland 511)

チャイルドは、非現実的な舞台・人物の登場する妖精物語の類ばかり目立つ(と、少なくとも彼女にはみえる)近年の児童文学作品を酷評する。なぜなら、それらの作品は、道徳的感化の要素を軽視、もしくは完全に無視する傾向にあるからである。道徳的教訓を軽視する傾向は、19世紀後半のアメリカ児童雑誌を研究する歴史家 R・ゴードン・ケリー (R. Gordon Kelly) も認めるところである。彼の分析によれば、攻撃的で暴力的な内容の煽情小説、もしくはロマンス小説の台頭する1865年を境に、児童文学の主たる目的が道徳や規律の教示から娯楽の提供へと変化する(91-93)。<sup>6</sup> チャイルドが児童文学を再び執筆した動機は、まさにこの変化に対する危機感にある。彼女は、読者、すなわちアメリカ社会の次世代を担う子どもたちに、社会的弱者に対する憐憫の心や優しさなどの重要性を伝えることで、彼らの人格形成、さらには社会改善を目指すべきという、児童文学者としての信念を持っていたのである。彼女は、児童文学に道徳的教訓が必須であるとの持論を正当化するために、ハンス・クリスチャン・アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805-75) の作品を例にとる。“The *meaning* of it [“the Ugly Duck”] is, to be sure, deeper than children can understand; but they *like* it” (Milton and Holland 511) とあるように、チャイルドは、子どもたちが理解できるか否かにかかわらず、名作には道徳的教訓が必ず含蓄されており、彼らは知らぬ間にその教訓を受容しているとラーコムに説く。

しかし、ここで一つの疑問が浮上する。確かに、アンデルセン童話には、現実社会にある善悪の問題や、別離や失敗、競争に伴う苦悩や孤独感などの人生における問題が内在している。しかし、そのさまざまな問題や感情を語るのは、人間ではなく動植物、あるいは無生物なのである。<sup>7</sup> この点こそが、相手の立場に立って心の声を聞けるアンデルセンの想像力の豊かさの現れで、作品全体の魅力なのであるが(佐藤 54-55)、同時に、非現実的な印象を与えやすい。彼

<sup>6</sup> 道徳性を軽視する傾向はアン・スコット・マクラウド (Ann Scott MacLeod) 12-13も参照のこと。

<sup>7</sup> デンマークの批評家ゲオルク・ブランデス (Georg Brandes) に言わせるならば、アンデルセン童話では、人間と動植物の間にある既存の秩序が完全に転覆しているため、人間像は単なる “accessories” (23) にすぎない。

の作品がファンタジー文学の範疇に入ることは、ファンタジー作品の書誌学者 ルース・ネーデルマン・リン (Ruth Nadelman Lynn) が、アンデルセン童話の全作品を分析した上で、彼をファンタジーの大家と絶賛していることから明白である (5)。

それではなぜ、ファンタジー色の強い当時のアメリカ児童文学界にとって、道徳的な模範例を提示すべき時局で、チャイルドはアンデルセン童話を例にとったのか。その理由は二つある。一つは、先述したとおり、道徳的教訓を秘やかに読者の心に刻む、アンデルセンの洗練された文学的技巧をチャイルドが高く評価していたことにある。事実、彼女は、アンデルセン流の手法を駆使して、「クリスマス」にクリスマス物語や家庭小説というヴェールをかける。家庭的なクリスマスパーティーの様子、たとえばツリーの飾りつけをする母親像や、プレゼント交換、合唱、創作劇の観賞会をする家族像が作品全体をとおして描かれているのである。<sup>8</sup> しかし、特筆すべきは、このクリスマスパーティー内にも、道徳的教訓が随所に盛り込まれている点である。一例を挙げれば、例年有り余るクリスマスプレゼントを与えられることに新鮮な感謝の心を忘れた富裕階級の子どもたちが、翌年のクリスマスになると、プレゼントをもらう代わりに慈善市を主催し、その収益を全て孤児院や黒人学校へ寄付する。つまり利己的な子どもたちが、両親から“giving without receiving” (Child 7) の大切さを教えられることで利他的精神を学ぶこととなる。このように、読者がクリスマス物語を読み進めると道徳的教訓を目にするように、チャイルドは「クリスマス」内に巧妙なからくりを仕込んでいたのである。

そして二つ目であり、より重要な理由は、ラーコム宛ての書簡の後半部分に隠されている。前半部分で児童文学を論評していたチャイルドは、突如話題を変え、「モミの木」(“The Spruce Tree,” 1837) も良作だと評価していること、そして未翻訳作品ならば翻訳したいとの意思をラーコムに伝える。注意すべきは、

<sup>8</sup> クリスマスという時期の設定もチャイルドの戦略の一つである。『ニューヨークからの手紙 第2シリーズ』(Letters from New York. Second Series.) の1843年12月25日付の第1信で、彼女は慈善や隣人愛を重視するクリスマスにこそ、奴隷制の是正について考えるべきだと読者に訴える。

If the poor have fewer pleasures than the rich, they enjoy them more keenly; if they have not that consideration in society which bring with it so many advantages, they avoid the irksome slavery of conventional forms; and what exercise of the benevolent sympathies could a rich man enjoy, in making the most magnificent Christmas gift, compared with the beautiful self-denial which lends its last blanket, that another may sleep? (21)

二つの理由から、1873年の時点で「モミの木」が未翻訳作品であったとは考え難い点である。その理由の一つに、アンデルセン作品群に対する19世紀アメリカ社会の反応を分析した批評家ハーバート・ローランド (Herbert Rowland) によると、誤訳が多いにせよ、1845年からすでにイギリス作家メアリー・ハウイト (Mary Howitt, 1799-1888) による訳本、もしくはその海賊版が、さらに1863年以降になると、アメリカ人翻訳家による訳本がアメリカ国内で出回っていた点にある (11-12)。<sup>9</sup> 事実、アンデルセン童話コレクションが1863年を皮切りに、64年、66年、69年と続々と出版されている。つまり、1860年代のアメリカ社会には第2次アンデルセン作品ブームが巻き起こっていたのである。もう一つの理由は、1873年1月号の *Ladies' Repository* 誌に掲載された、アンデルセン自伝に対する批評の中で、エミリー・F・ウィーラー (Emily F. Wheeler) が “The Fir-Tree” (58) を彼の代表作の一つに挙げている点にある。

しかし、たとえ故意だとしても、チャイルドには「モミの木」の作品名を言及する理由があった。その理由とは、彼女が「モミの木」内の道徳的教訓に手を加えて、次節以降考察していくように、「クリスマス」に反映させていたことにある。<sup>10</sup> すなわち彼女は、「クリスマス」執筆時には、客寄せ効果の絶大なアンデルセン作品という大木にすぎること、自己の存在を世間に証明しようとし、さらにラーコム宛ての書簡を書いた1873年には、訳本の出版によって「クリスマス」に込めた道徳・政治思想へ読者を再注目させることをもくろんだのである。

<sup>9</sup> 海賊版の横行については、アメリカ社会内におけるアンデルセン作品の需要について分析した批評家エリック・ダル (Eric Dal) も認めている (3)。

<sup>10</sup> チャイルドが「モミの木」に注目する理由はもう一つある。若手作家の台頭によって年寄り扱いを受ける自身の窮状を、モミの木の姿に投影していることである。一例を挙げると、“I'm not at all old!” (Andersen 221) とモミの木は二度繰り返す。この叫びは、ゲイル・ハミルトン (Gail Hamilton) という別名を別名を持つ『フォークス』の元編集者メアリー・アビゲイル・ドッジ (Mary Abigail Dodge, 1833-96) の暴露本『著書の戦い』 (*Battle of the Books*, 1870) をとおして、同誌出版社社長ジェイムズ・トーマス・フィールズ (James Thomas Fields, 1817-81) が女性作家全般の原稿料を安く設定していた事実を知ったチャイルドの叫びに呼応する。彼に宛てた書簡の中で、チャイルドは、“Old I am, but lazy I am not.” (Meltzer and Holland 437)、または “I thought I ought not to be put at the foot of the ladder, and I wanted to know whether I had been.” (473) と、他作家に劣らない自身の文学的才能を強烈に訴え、それに応じた原稿料を支払うように念を押した。『フォークス』随一の人気を誇るハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) にさえ、フィールズが一作品当たり50ドルの原稿料しか支払っていない史実は、オースティン (Austin) 282参照。

## 2 モミの木の衣装と植民地主義／土着主義

本節では、以上の考察をもとに、「モミの木」とその翻案「クリスマス」に共通するモチーフを分析し、そこに織り込まれた道徳的教訓を検討する。

「モミの木」は、クリスマスツリーになることを夢見るモミの木が、クリスマス当夜の繁栄と翌日以降の凋落を経験することで、絶望感や人生における幸福な時間のはかなさを読者に伝える作品だと言える。詳解すると、商業用に伐採され、ある富裕階級の家庭に搬送されたモミの木は、クリスマス当日、お菓子や果物、ろうそく、おもちゃ、大きな星などで豪華に飾られる。しかしクリスマスパーティーが始まると、木を倒すかの勢いで寄ってきた子どもたちによって、モミの木は、枝に飾られたものを全てもぎ取られる。翌朝になると、モミの木は屋根裏部屋に連れていかれ、そこに住む動物たちに用済みの老人のような扱いを受ける。チャイルドが「モミの木」に注目した理由は、本作品内に折り畳まれた「老人への慈悲心」(Milton and Holland 511) や「困窮者への同情」(511) などの道徳的教訓にある。彼女は、それらの教訓を読者に喚起させる契機を、モミの木の飾り付けの有無に見出す。そして、裸のモミの木と装飾されるモミの木のモチーフは、彼女の手によって、リッチ家とその他の子どもとの階級格差を視覚的に表象することとなる。<sup>11</sup> なぜなら、「クリスマス」の子どもたちは、富裕階級の恩恵にあずかりながら、その柁を踏み越え、貧困にあえぐ人々に対する施しを与えているからである。しかし、モミの木の衣装の有無というモチーフは、貧富の差、つまり階級問題のみを射程にとらえているわけではない。リッチ家の慈善市の目玉である創作劇を見てみよう。

劇は2幕構成となっている。第1幕はリッチ家末娘アリス (Alice) 中心の若手班、第2幕はリッチ家長男であり本劇の脚本家でもあるフランク (Frank) 中心の年長班が担当する。第1幕は、カーテン幕が開いて役者4名が登場する場面から始まる。彼らが“a Tableau of Europe, Asia, Africa, and America” (Child 7) を表象していると観客に印象付けるのは、他ならぬ衣装(あるいは裸)の効果にある。各役者の役柄や衣装を見ると、ヨーロッパ役のアリスは、白いムスリムを着ており、亜麻色の髪の毛には青い小花と真珠のビーズが飾られる。茶箱に

<sup>11</sup> アンデルセンが衣装、もしくはそれにまつわる視覚的效果に注目していたことは、彼の代表的作品「皇帝の新しい衣装」(“The Emperor’s New Clothes,” 1837) からも明白である。またチャイルドが視覚的效果を援用している他作品としては、『ミセラニー』の一作品「メアリー・フレンチとスーザン・イーストン」(“Mary French and Susan Easton,” 1834) も好例である。大串尚代氏の指摘どおり、人種の視覚的な虚構性が批判的に描かれた作品である(121-22)。

座ったアジア役のジョー (Joe) は、クジャクの羽を飾った丸帽子と辮髪に特徴的な、清朝時代の高級官僚の格好をする。アメリカ役、特に、いわゆる「インディアン」首長役を務めるジョン (John) は、七面鳥の羽で作られた羽根冠をかぶり、ウォムパムのベルトが巻かれたビーバー皮のスカートとモカシンの靴をはき、手には弓矢とリスのはく製を持つ。アフリカ役で、ダチョウの羽がついた金色の王冠をかぶるキティー・ジョーンズ (Kitty Jones) は、メリノ生地ミニスカートををはき、脚本家フランクが木材で作ったにせ象牙を握っている。彼らの小道具、たとえば、ヨーロッパ役に横付けされた船や、ビーズ、茶箱、毛皮、弓矢、象牙などは、当時の白人の商業的欲望を世界的規模で展開した “the fur trade” (9) を前景化させるものである。また、彼らの身体の色に着目すると、役者たちを白人／非白人に差異化するよう、フランクが念入り且つ巧妙に準備していたことに気付かされる。なぜなら彼は、まるでミンストレル・ショーをもじったかのように、リッチ家の親戚の白人少年であるアジア役の全身を黄褐色に、アメリカ役を赤褐色に塗っているからである。さらにフランクは、アフリカ役として、黒色に染められた白人ではなく近所の黒人少女を連れてきている。有色人種が3人横並びにされる効果に、ヨーロッパ役アリスの白色の衣装の効果が相まることで、より一層アリスの白さが目立つ結果となる。このように、4人の役者の衣装には、白人／非白人やヨーロッパ人／非ヨーロッパ人、もしくは植民地主義／土着主義などの視覚的構図を観客が瞬時に察知するよう配慮されている。以上のことから、モミの木に裸の姿と過剰に飾られる姿との対照によって焦点化される衣装の問題が、本劇の視覚的構図にも引き継がれていることは明白と言えよう。

衣装の視覚的効果をさらに増幅させる方法として、フランクは本劇を無言劇に設定する。加えて本劇は、ある語を当てさせるために、まずそれを構成する音節の一つずつについてヒントを出し、最後に全体のヒントを出すなどなぞの一種、“charade” (10) の形式をとる。これらの脚本家の工夫によって、観客は、シャレードの回答を練り出すために、自身の視覚に依存した形で舞台を眺めることになる。しかし特記すべきは、無言劇にもかかわらず、フランクがヨーロッパ役アリスのみに、ヨーロッパ貿易船の出港合図 “Oo-up” (12) という声を与える点である。号令を発する結果、ヨーロッパ役は、視覚ではなく声によって絶大な権力を握ることになる。換言すれば、声の有無という他役者との決定的な差異によって、ヨーロッパ役の少女を中心とした植民地主義／土着主義を始めとする当時の世界情勢が、驚くべきスピードで顕現するのである。なぜなら、

横並びの4人をまんべんなく見ていた観客は、ヨーロッパ役の声に気付くことで、まるで彼女の立ち位置にスポットライトが当たっているかのように、彼女に視線を集中させることになるからである。ただし、ここで看過できないのは、唯一専制的に振舞うはずのヨーロッパ役が号令を間違えることで、いかにも帝国主義的な趣のこの無言劇が、失笑の漏れるコメディへと変化する点である。

Alice spied out her white poodle snuffing round the room in search of her. Then she forgot all the instructions she had received, and called out, "Poody! Poody!" That was a very improper proceeding for Europe, with a ship by her side to represent the commerce of the world. And it made Asia laugh out loud; which was an unheard of want of dignity in a Mandarin upon a state occasion. America grinned rather too broadly for a sedate Indian chief. (9)

アフリカ役の反応については次節で考察することから、ここでは彼女がヨーロッパ役を嘲笑することはなかったという言及にとどめたい。アリスがセリフを間違えた場面に議論に戻すと、この場面が象徴するのは、ヨーロッパ役のたった一言の言い間違いによって、実権を握ろうとしていた張本人が道化と化すことに他ならない。同時に、この始末は、白人優越思想でもって帝国主義政策を肯定するような劇の図式が、それに対する批判的意識を持った劇の図式へと転化したことをも意味する。その転化の起点がモミの木に付随する視覚効果であったことにかんがみると、「モミの木」の翻案は、やはり階級問題のみならず人種問題をも範疇に入れていることになる。

### 3 船の形象と奴隷制問題

「モミの木」の翻案に込められた重層的な道徳的教訓を念頭に置くならば、劇中の小道具の一つである船の形象がモミの木の運搬船の形象へと重ね合わされていることに気づく。その重複したイメージを確認するために、モミの木が切り倒された時の様子を引用してみる。

The axe cut deep into its marrow and it fell with a sigh to the ground, feeling a pain and faintness, and quite unable to think of anything happy. It was so sad at the thought of parting from home, from the spot where it had grown up, knowing that it would never more see its dear old companions, the little

bushes and the flowers that grew round it, nor even, perhaps, the birds. Going away wasn't a bit pleasant. (“Andersen” 218)

モミの木は、激痛を伴う伐採、離郷の悲嘆に暮れながらの乗船を経て、搬送先の家庭で新しく装飾されることになる。この姿は、文化や言語を奪われ、奴隷船に積荷として載せられ、新大陸へと強制連行された後、新たに奴隷という身分とそれにふさわしいイメージで装飾されていくアフリカの民の似姿となる。「クリスマス」内のアフリカ役が黒人奴隷に設定されていることは衣装から読み取れる。なぜなら、衣装からして、ヨーロッパ役が貴族、アジア役が中国の高級官僚、アメリカ役が「インディアン」首長と、各部族内の社会的地位の高い人物として設定されているのに対し、アフリカ役の衣装だけは趣を異にするからである。まず、キティーは、メリノ生地ミニスカート以外、何も身に着けていないため、肌を露出させている。加えて、彼女の腰と足首に巻きつけてある金紙に着目すると、これらがただの装飾品ではなく、奴隷売買を連想させる腰縄と足かせの役割を担っていることが判明する。なぜなら、アリスが台詞を言い間違える場面で、アジア役は大笑いし、アメリカ役はにやけたのに対して、“Africa was perfectly motionless in every muscle, and looked a little bit afraid” (Child 9) とあるように、キティーだけは体を硬直させているからである。さらに彼女の体現する恐怖感に奴隷制問題が大きく連関していることは、フランク自身が証言するものである。“[W]hich Frank said was very natural, considering Europe was so near with her ship, and still carrying on the slave trade” (9-10) とあるように、フランクは、彼女の硬直状態の原因を、貿易船に連行される危険性の高さ、すなわち、奴隷貿易に対する恐怖心にあると観客に明確に説明する。質疑応答形式という本劇の上演方法を無視して、観客に回答時間を設けることをせず、脚本家自身が種明かしをした主因は、アリスの失言によってアフリカ役まで笑い出す危険性を阻止したい心理作用にある。すなわち、フランクは、本劇から奴隷制、特に奴隷売買のキーワードが浮かび上がらない非常事態を強制終了によって回避したいのである。

奴隷制への批判精神をさらに強固にするために、フランクは第2幕、すなわち、奴隷貿易問題を表象する役者たちが退場した直後に、もう一つのシャレードを用意する。登場人物は、時の翁 (Father Time) 役のフランク、彼の後ろにつながれ、最先端のドレスを着たりッチ家長女イザベル (Isabel)、そして、時の翁につながれていない形で、古臭い格好をする次女エレン (Ellen) とリッチ夫人 (Mrs.

Rich) の4名である。

Frank came tottering in, bent half double, with a white wig on his head, and hour-glass in one hand a scythe in the other. He was followed by Isabel handsomely dressed in the newest mode. Afterward Ellen and her mother appeared dressed just as women and little girls dressed forty years ago. . . . Ellen, . . . replied, “Isabel acted her part beautifully; flirting her fan, courtesying, and swinging her crinoline . . .” (10)

女性陣の衣装が新旧という対称軸で比較されている点は着目に値する。クリノリンは、一着に10メートルもの布地を張り輪に巻きつけ、膨らみを持たせたスカートである。その製作には、布地代に加え、幅広のスカートというキャンバスに施す刺しゅうやレース、重層的なフリルなどの装飾品代、そして、それらを手で縫い上げるための人件費が必要となる。つまり、クリノリンの製作には膨大な費用が掛かるため、出来上がったスカートは裕福さと同義となる。クリノリンとリッチ夫人のまとう昔風の衣装とを比較すると、後半の無言劇でも、アンデルセン作「モミの木」における、モミの木に付随する華美と質素という衣装のモチーフが再度提示されていることが分かる。

さらに特徴的なことは、「モミの木」を伐採する斧のイメージが、第1幕では人間関係を解体する奴隷制へ、さらに第2幕では大鎌へと連綿と受け継がれていることである。そして第2幕においては、時の翁の持つ大鎌の刈る効果によって死にゆく運命にある貴婦人と、その姿を傍観する平民という、前者の特権政治の没落を鍵概念にした構図が観客に視覚的に提示されることになる。第1幕の内容を敷衍して言えば、この構図は、アフリカ役が移住先の南部貴族を殺すという構図となり、そこには痛烈な奴隷制批判が含蓄されているのである。<sup>12</sup>

#### 4 チャイルドの対外評価

以上述べてきたように、「クリスマス」は、表面上、プレゼント交換や合唱、家庭劇、シャレードなど、家庭内の娯楽の目立つクリスマス物語となっている。しかし、その裏側には、人種・階級差別問題の是正に向けたチャイルドのメッセージが明らかに潜む。このような道徳的教訓を作品の背後に潜ませるアンデルセン的な手法を、チャイルドは『フォークス』に寄稿した第1作目「フレディーの新年の晩ご飯」(“Freddy’s New-Year’s Dinner: A Story for Small Young Folks,”

1865年7月号、以下「フレディー」と称す) 執筆時から意識していた。なぜなら、本作品は、表面上、貧乏白人少年フレディー・リンカーン (Freddy Lincoln) が、翌日から戦地に赴く北軍兵士と出会い、キャンプ地内の案内を受ける作品となっているからである。先述した批評家マーティンによれば、1860年代の児童文学作家は、北軍兵士の勇敢さや愛国心などを一種の冒険物語として描くことで、読者、つまり未来の北軍兵士ヘリクルート活動を行う風潮があった (*Children's War* 32)。「フレディー」が冒険物語や戦争物語の範疇に属する作品に仕上がっている点に着目すると、チャイルドが当時の児童文学の流行に相応するよう趣向を凝らしたことはまず間違いない。しかし、本作品の背後には、たとえば、キャンプ地で贈られた食料を母親に持ち帰る少年の優しさや、ホーム・フロントで父親の帰宅を待つ同年代の少女への同情など、道徳的教訓を読者に与えるであろう要素が潜んでいる。第2作目「おじいさんの栗の木」(“Grandfather's Chestnut Tree,” 1865年10月号、以下「栗の木」と称す) も同様に、表面上は都会出身の白人少女が田舎の祖父母の家へ宿泊する異文化体験記となっている。しかし、本作品にも、バスケット売りの「インディアン」少女との友情や、経済的に不安定な彼女の一家に対する同情など、道徳的教訓が含蓄されている。さらに、本作品に大陸横断鉄道の敷設という伏線が張られることで、来るべく本工事によって伐採される祖父の寵愛する栗の木の運命が、白人側の政治的圧力によって先祖代々受け継いできた伝統や文化を一掃される「インディアン」の運命にたとえられる。チャイルドは、本作品をとおして、白人の商業主義に飲み込まれる被圧制者の苦悩や葛藤を、程度差こそあれ、作中の白人へ、さらに読者にも追体験させるよう試みたのである。

戦争物語や冒険物語、家庭小説など、当時の読者の好みに合わせるチャイルドの試みは、果たして『フォークス』の読者に受け入れられたのか。その反応を確かめる情報源は二つある。一つは、『フォークス』の通信欄「郵便箱」(“Our Letter Box”)である。1866年1月号から1873年の最終号まで続いた「郵便箱」の総ページ数は325ページに上る。しかし、この中にチャイルド作品へのコメントが載ることは一度もなかった。この反応の薄さからも、3作品がともに読者受けするものでなかったことは瞭然である。もう一つは、『ニューヨークタイムズ』(*New York Times*)の新着雑誌紹介欄である。たとえば、「フレディー」に対する1865年7月10日付の記事は、“Her [Mrs. Child's] ‘Freddy's New-Year's Dinner’ proves how welcome she will be to youthful readers.” (5) とあるように、久し振りに児童文学作品を執筆するチャイルドを厚遇する。次に、1865年10

月2日付の記事も、以下のとおり、彼女や新作「栗の木」を冒頭で紹介する。

The honored name of L. MARIA CHILD will give currency to the first article, 'Grandfather's Chestnut Tree,' independently of its intrinsic merit. Mrs. H. B. STOWE, LUCY LARCOM, Mrs. WELLS, and other ladies who know best what children like are wisely relied upon, for the staple contents of *OUR YOUNG FOLKS*; . . . (5)

前回との相違点は「名誉ある」という称号が名前の前に加わった点である。この変化は、一見すると、前作が予想外に高評価を受けたことで、彼女や彼女の作品への期待が高まった印象を与える。しかし、さらに注目すべきは、他の女性作家が読者本位の作品作りを手掛け、確固たる地位を築いたという後半の内容である。この比較論を考慮すると、チャイルドに付いた称号は、子どもの趣好に沿うか否かを顧みることなく、我流を押し通す作家として、もしくは過去の有名作家として評されたも同然の、遠まわしな皮肉に過ぎなかったことが分かる。他の児童文学作家とチャイルドとの児童文学観の根本的相違に起因する低評価ゆえに、第3作目、すなわち「クリスマス」を紹介するはずの新着雑誌紹介欄(1866年1月27日付)には、もはやチャイルドの名前さえ出てくることはなかった(5)。以上の二つの媒体からは、当時の児童文学界の趨勢から取り残されたチャイルドならびに「クリスマス」という作品の状況が明白な形で浮かび上がる。

しかし、だからといって、彼女が人種差別問題の是正に向けて作中に込めたメッセージが無意味だと言えるだろうか。当時高い人気を誇っていたアンデルセンの代表作の一つ「モミの木」を自己流にアレンジし、その翻案「クリスマス」にクリスマス物語や家庭小説の雰囲気を漂わせ、シャレードや創作劇という遊び心を持たせながらも、その背後に人種問題を濃厚に絡ませるチャイルドの文学的戦略・技巧は、非常に洗練されている。その意味で、チャイルドは、優れた児童文学作家であり、社会改善の必要性を真摯に訴え続けた社会改革者でもあると評価できるのである。

### 結論

チャイルドが「モミの木」を翻訳することはついぞなかった。同時に、「モミの木」の翻案「クリスマス」によって再起をかけたチャイルドの児童文学作家としての復活は、完全にはならなかった。だがここで我々が忘れてならないこと

は、同時代の児童文学がファンタジーの色を帯び、単なる娯楽の道具と化していく現状に批判的な目を向けていたチャイルドが、道徳的教訓を盛り込んだ児童文学の復活を「モミの木」の翻案に託した事実である。彼女は、モミの木の形象に折り込まれた道徳的教訓の重層性に着目し、他者への倫理的精神を欠いた同時代の独善的な道徳のはびこりに対する批判を呼び起こす手段に用いた。ゆえに「クリスマス」は、非政治的なファンタジーへと傾倒する児童文学界やそれらの作品を好む大衆が到底受け入れることのできない多層的で道徳意識の強い内容を提示することになる。チャイルドは、「モミの木」の翻案「クリスマス」によって、児童文学界の改革、そして当時の人々が共有する道徳観の変革を、ひそかに試みていたのである。

#### 引用文献

- Andersen, Hans Christian. “The Fir-Tree.” *Fairy Tales*. Trans. Reginald Spink. London: Everyman’s Library, 1992. 215-24.
- Austin, James C. *Fields of the Atlantic Monthly: Letters to an Editor, 1861-1870*. San Marino: Huntington Library, 1953.
- Brandes, Georg. “Hans Christian Andersen (1869).” *Creative Spirits of the Nineteenth Century*. Trans. Rasmus B. Anderson. New York: Crowell, 1923.
- Child, Lydia Maria. *Letters from New York. Second Series*. New York: C. S. Francis, 1845.
- . “Note.” *Juvenile Miscellany* July-Aug. 1834: 323.
- . “The Two Christmas Evenings.” *Our Young Folks: An Illustrated Magazine for Boys and Girls*. Jan. 1866: 2-13.
- Clifford, Deborah Pickman. *Crusader for Freedom: A Life of Lydia Maria Child*. Boston: Beacon, 1992.
- Dal, Erik. “Hans Christian Andersen’s Tales and America.” *Scandinavian Studies* 40 (1968): 1-25.
- Gordon, Beverly. *Bazaars and Fair Ladies: The History of the American Fundraising Fair*. Knoxville: U of Tennessee P, 1998.
- Karcher, Carolyn L. *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child*. Durham: Duke UP, 1994.
- Kelly, R. Gordon. *Mother Was a Lady: Self and Society in Selected American Children’s Periodicals, 1865-1890*. Westport: Greenwood, 1974.
- “‘Literary’: Magazines and Reviews of the Month.” *New York Times* 27 Jan. 1866: 5.
- Lynn, Ruth Nadelman. *Fantasy Literature for Children and Young Adults: An Annotated Bibliography*. New Providence: Bowker, 1995.

- MacLeod, Anne Scott. *A Moral Tale: Children's Fiction and American Culture, 1820-1860*. Hamden: Archon, 1975.
- “Magazines for July.” *New York Times* 10 July. 1865: 5.
- “Magazines for October.” *New York Times* 2 Oct. 1865: 5.
- Marten, James. *The Boy of Chancellorville and Other Civil War Stories*. New York: Oxford UP, 2002.
- . *The Children's War*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1998.
- Meltzer, Milton, and Patricia G. Holland, eds. *Lydia Maria Child, Selected Letters, 1817-1880*. Amherst: U of Massachusetts P, 1982.
- Mills, Bruce. *Cultural Reformations: Lydia Maria Child and the Literature of Reform*. Athens: U of Georgia P, 1994.
- Rowland, Herbert. *More Than Meets the Eye: Hans Christian Andersen and Nineteenth-Century American Criticism*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2006.
- Taketani, Etsuko. “The ‘Omnipresent Aunt’ and the Social Child: Lydia Maria Child’s *Juvenile Miscellany*.” *Children's Literature* 27 (1999): 22-39.
- Wheeler, Emily F. “Hans Christian Andersen.” *Ladies' Repository: A Monthly Periodicals, Devoted to Literature, Arts, and Religion* 11 (1873): 55-59.
- 大串尚代 『ハイブリッド・ロマンス——アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統——』 東京、松柏社、2002年。
- 佐藤義隆 「アンデルセンの世界 2——21世紀へ伝えたい豊かな世界——」 『岐阜女性大学紀要』 第30号、2001年、53-67頁。
- 牧野有通 「訳者解説」『孤独なインディアン——アメリカ先住民名作集』 リディア・マリア・チャイルド著、牧野有通訳、東京、本の友社、2000年。188-91頁。